

コンタクト・ゾーンとしてのオリシャ崇拝運動

アフリカ系アメリカ人による社会運動の境界をめぐって

小池郁子(京都大学人文科学研究所)

本発表の目的は、アメリカ合衆国のオリシャ崇拝運動を複数の文化が接触している領域として捉え直すことである。そうすることで、オリシャ崇拝運動において、人種、民族、宗教、思想、言説がどのように交錯しているのかを明らかにする。米国で実践されているオリシャ崇拝は、キューバ共和国のアフリカ系宗教とされるサンテリアから派生した宗教的实践である(*1)。ただし、これまでの研究では、米国で実践されているオリシャ崇拝について、オリシャ崇拝運動が標榜する思想や哲学との関係からとりあげられてきた[Hunt 1979; Pinn 1995; Curry 1997; Clarke 2001]。そうした研究では、オリシャ崇拝者のなかでも、サンテリアとは異なる実践をおこなっているという、差異化意識をもつ崇拝者の視点が注目されている。そのため、オリシャ崇拝をサンテリアとは異なる宗教実践として提示してきたきらいがある。

そこで、発表では、オリシャ崇拝がサンテリアと接触すると同時に、重なり合い、離れていくような領域、コンタクト・ゾーンに着目する。すなわち、オリシャ崇拝と呼ばれる宗教実践が、サンテリアとどのような位置関係にあるのか、さらに、崇拝者は必要に応じて二つの実践の関係をいかに変化させようと試みているのかを明らかにする。また、アフリカ系アメリカ人のサンテリア実践者や、オリシャ崇拝運動そのものに従事しないオリシャ崇拝者たちの運動にたいする姿勢を取り上げる。そうして、オリシャと関わる人々のなかで、オリシャ崇拝とサンテリアがどのように位置づけられているのかを検討する。

ここで問題になるのは、オリシャ崇拝運動が、どのような観点からコンタクト・ゾーン[Pratt 1992; 古谷 2001; 田中 2007]として議論できるのかということである。端的に述べるならば、オリシャ崇拝運動は、米国という国民国家のなかで、人種と宗教が交錯している領域である。そこでは、帝国主義による大西洋奴隷貿易と、その後の奴隷制度で培われてきた黒人性と白人性が交渉されている。それは、未開性と文明性、あるいは、土着宗教とキリスト教、純粋性と混淆性という用語で置き換えることもできる。より厳密には、米国とキューバでのアフリカ文化の継承のされ方、アフリカ性およびカトリズム性の持つ意味などが争点となっている。このような視点から、オリシャ崇拝運動をコンタクト・ゾーンとして捉え直し、そこで個人や集団が文化的差異を構築するためにどのような事象が争点となっているのかを検討する。

以下、構成について述べる。まず、アフリカ系アメリカ人の社会運動であるオリシャ崇拝運動とはなにかを明らかにするために、ヨルバから米国へ渡ったオリシャ崇拝の歴史的背景について述べ、米国でオリシャ崇拝運動が成立した過程を説明する。つぎに、オリシャ崇拝運動が、その運動の核となる宗教実践をサンテリア、つまり、キューバのアフリカ系宗教とどのように差異化させているのかを示す。さいごに、オリシャ崇拝が、サンテリアと重なり、離れる諸相を宗教上の家族(ゴッド・ファミリー)の系譜や、オリシャ崇拝運動の成員の宗教実践などから明らかにする。

まとめるならば、本発表は、Prattのいうコンタクト・ゾーンのなかで生じているダイナミズムを取り上げる。すなわち、本発表は、互いに異なる文化が接触しているのではなく、ある文化が分離し、その分離過程で創出された他者との差異化の実践を考察する。そうして、文化が社会運動の成員によって恣意的に変化させられるとともに、文化がどのように純粋化、あるいは、混淆化されるのかを検討する。そうすることで、文化が分離、変化していく様相を動的に捉えるとともに、Prattのコンタクト・ゾーンが静態的で、文化的な距離が遠い文化の接触を想定しているところ、いいかえれば、文化を純粋なものとして想定しているところに限界があることを指摘したい。

(*1) オリシャ崇拝は、西アフリカ、ヨルバランドを起源とする宗教である。ただし、本発表では、米国で実践されているオリシャ崇拝のことを、文脈から明らかな場合、冗長になることを避けるために「オリシャ崇拝」と記す。

【コンタクト・ゾーン、社会宗教運動、文化的差異の構築、アフリカ宗教、アフリカ系アメリカ人(アメリカ黒人)】